

国立病院機構 横浜医療センター（横浜市戸塚区）

上田喬士

皆さまにおかれましては、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行により大変なご苦勞の最中と存じます。

最初に、この場をお借りして、ご紹介して下さる先生方に感謝申し上げます。当院に赴任して約5年となりますが、大学に在籍していた頃よりも多くの希少な症例を診察させていただいていると感じております。

当院は、横浜の西南部にあります。国道1号の「原宿」の交差点（渋滞する交差点）を曲がってすぐのところです。どこの駅からもバスで数十分はかかる交通の便が悪い場所に建っています。赴任にあたりインターネットで物件を調べていたところ、アクセスの悪さから「原宿は陸の孤島」と書かれていました。ドリームランド（閉園した遊園地）の跡地の公園から見ると、当院は高台の上に建っていて、病院が海面上に浮かぶ島のようにも見えます。あながち孤島という表現も当たらずとも遠からずだと思います。一方、院内の上層階からは富士山がきれいに観察できて、よく入院患者さんが夕焼けの富士山を眺めています。

当院は510床の病院です。皮膚科医は私と後輩の2名体制で、非常勤はいません。皮膚科全般の診療をしており、保険外の自費治療は行っていません。地域医療を担えるよう、なるべく入院患者さんを引き受けるようにしていますが、ときには緊急のご依頼に応えられず申し訳ないとも感じております。

手術については、基底細胞癌や、ボーエン病などの前癌病変など、切除ですむ腫瘍について積極的に手術をしています。ときには形成外科の先生にもご協力頂き手術にあたっていますのでご相談・ご紹介ください。クリニックで管理が難しいステロイド全身投与の疾患は、なるべく当科で加療しています。



病院の外観

そのため、水疱症の患者さんがたくさんおります。他にも、生物学的製剤を積極的に使用しています。近年は生物学的製剤を使用している乾癬、アトピー性皮膚炎、蕁麻疹の患者さんが増加しており、特にここ1年はデュピルマブの使用患者さんが増えました。導入のみのご依頼でも検討いたしますので、事前にご相談いただければ幸いです。

どうしても、人員的に対応できない疾患があります。例えば、集学的治療が必要な悪性腫瘍・血液腫瘍（悪性黒色腫、乳房外パジェット病、菌状息肉症など）、広範囲3度熱傷やTEN・SJS、食物依存性運動誘発アナフィラキシー（FDEIA）・アスピリン蕁麻疹の負荷試験は原則ご紹介の対象としています。

当院は完全紹介制となっています。紹介の方法は3つあります。1つ目は通常通り紹介状を持参していただく方法です。水曜日の手術日以外の平日（月、火、木、金）は、10時30分まで初診受付をしております。2つ目は、ファックス予約です。地域連携室を介してご予約をしていただけますが、少し先の予約となるため、緊急性のない疾患のご紹介にご活用ください。3つ目は、ヨコハマキラリネットを介した予約です。ヨコハマキラリネットは、当院を中心にネットワーク上で病院と診療所・薬局等の連携

を行うシステムです。事前にヨコハマキラリネットに登録していただきますと、インターネットを介して紹介予約ができます。また、患者さんの同意が必要ではありますが、一部の検査結果やサマリーを見ることができます。インターネットを介して、各病院が繋がり、情報が行き来する時代になりつつあります。ご興味のある先生がいらっしゃいましたら、当院ホームページに詳細な記載がありますのでご参照ください。

昨年も、冬期恒例となっている、バスターミナルにある木（シンボルツリー）のイルミネーションが灯りました。このイルミネーション、ある年は病院が赤字転落の危機となり、費用削減のため灯りませんでした。私は以前、赤字経営で崖っぷちの状態の病院に勤務した経験があります。そのときは、経営改革の名のもと「売上のいい診療科の人員を増やして、売上の悪い診療科を減らす」という方針が示され、結果的に皮膚科は縮小となる苦い経験をしました。そのため、当院も赤字続きだと、皮膚科が真っ先に潰されてしまうのではないかという恐怖心から、私はこのイルミネーションをひそかに「希望の



病院前の木のイルミネーション

光」と呼んでいます。今後、当院の皮膚科の人員が増員されるには、大学の医局員が十分いること、そして病院が黒字であることが最低条件となると考えていますので、「希望の光」が途絶えないように毎年願って、皮膚科も微力ながら頑張っております。

これからも地域の先生方と協力して診療を行っていきたく思っておりますので、ご指導のほど何卒よろしくお願いいたします。

大和市立病院（大和市）

徳永千春

病院について

大和市は、神奈川県ほぼ中央に位置し、横浜、相模原、藤沢、海老名、座間、綾瀬、東京都町田の各市に隣接する人口約23万人の自治体です。大和市立病院は、1955年に大和町国民健康保険直営病院として、診療科3科（内科、外科、産婦人科）、病床数24床の規模で誕生しました。その後、診療科目の増設と病床数の増加に伴い、1968年に大和市立病院の名称に変更されました。1993年には全面建て替えが行われ、現在は診療科25科、病床数403床の総合病院となり、地域医療を支える基幹病院として診療しています。最近では、2017年に大和市の小児救急医療の強化のため、2次救急患者の



皮膚科外来のスタッフと筆者（前列左）

24時間365日の受け入れを開始しました。さらにハイケアユニット（HCU）の設置や地域包括ケア病棟の開設などにより、急性期治療だけでなく、急性期治療終了後の退院復帰支援も行えるようになりました。

病院への最寄り駅は小田急江ノ島線「鶴間駅」「大和駅」ないし相模鉄道「大和駅」です。駅からバスを利用される方が多くいらっしゃいますが、“のろっと”や“やまとんGO”（大和市のイメージキャラクターで、葉っぱの妖精“やまとん”が目印）などのコミュニティバスも運行しています。病院の正面玄関に入ると、総合受付の上部に設置されているステンドグラスに目が留まります。大和市の木、「ヤマザクラ」が描かれており、病院を訪れる人々だけでなく職員にも安らぎを与えてくれます。

また、大和市は厚木基地があることに加え、難民の方々への支援など地域レベルでの国際交流も盛んです。大和市民の約34人に1人（2019年12月末時点）が外国人市民で、81ヶ国にルーツを持つ外国籍の方が住民登録をしています。そのため来院患者も国際色豊かで、スペイン語、ベトナム語、英語については通訳の対応が可能です。言語学習に興味のある方には最適の職場かもしれません（残念ながら私は、20年間全く習得できずにおりますが、笑）。

皮膚科について

1969年に開設され、渡辺義一先生、鎌田直子先生、花岡宏和先生、村上通敏先生が非常勤医として勤務され、1977年の宮田（向井）千珈子先生より常勤医となりました。1979年より26年間、新井春枝先生が膠原病の診療と研究に従事され、その先生の下で多くの若手医師が指導を受けました（私もその1人です）。その後、長瀬彰夫先生が医長を12年間勤められ、2013年の退職に伴い、私が引き継がせて頂くことになりました。

外来の一般診療は平日の午前中で、予約をお持ちでない方の受付は10:30までです。初診を含めた

予約外と再診予約を医師1名ずつで担当しています。皮膚生検や小手術は平日午後に予約制で、全身ないし脊椎麻酔下での腫瘍切除や植皮術は月曜日午後手術室で行っています。整容の配慮が必要な症例や再建が必要な手術は、当院形成外科ないし北里大学病院、聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院、昭和大学藤が丘病院の形成外科を紹介させて頂いております。皮膚疾患全般を診療していますが、リンパ節の生検や廓清、化学療法が必要な悪性腫瘍は取り扱っておりません。年間の生検は約300例、手術は約190例、1日の平均患者数は外来が約60名、入院は約5名です。

当院の近隣のクリニックには皮膚科専門医の先生方が多くいらっしゃいます。最近皮膚科以外を専門にしている先生方からの紹介が増え、とても嬉しく思っています。

皮膚科スタッフについて

医師は、常勤医である私と北里大学皮膚科学教室からの派遣の医師、月1回の非常勤医師の計3名です。そして、様々な診療科で経験を積み、皮膚科以外の疾患にも精通している看護師とスムーズな患者対応をしてくれる受付事務のスタッフに支えられ、楽しく日々の診療を行っています。

大和市の方では、今、大問題となっている新型コロナウイルス対策で、除菌効果のある次亜塩素酸水を製造し、市民への無料配布を始めました。そして、重症化リスクの高い高齢者のため、80歳以上の市民全員に手紙を送り、専用の相談窓口を開設するなど、大木哲市長の当意即妙なる采配により、感染防止への大きな支援を頂いています。患者の高齢化により、疾患の診断と治療を行うだけでなく、個々の環境などを配慮した、きめ細やかな対応が必要だと日々感じています。当院を受診される患者さんに質の高い医療を提供できるよう、これからも精進して参りますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

聖マリアンナ医科大学病院は川崎北部宮前区の丘の上にあります。冬の晴れた日は富士山が見えて爽快ですが、坂を登るのは若干辛いものがあります。許可病床数は1,175床という大型の病院で、大体何でも揃っている大型病院です。特徴としては、創始者がキリスト教信者であったため、病院内にチャペルがあることと、勤務犬のスタンダードプードル「モリス」がいることです。

大学病院は1974年に開院したのですが、流石に老朽化は否めず、現在新病棟を鋭意建設中で、新病棟は2022年度にオープン予定です。その後、外来棟の改修やロータリーの整備などが予定され、最終的には2026年度にグランドオープンとなる長期計画となっています。

聖マリアンナ医科大学病院は一応の最寄駅が小田急線の生田駅ですが、歩くと30分強かかります。バスは向ヶ丘遊園、新百合ヶ丘、溝の口、あざみ野などから多数出ており、朝の時間帯は病院入口のロータリーはバスで一杯です。一時期は大学のすぐ近くの地下を通っている貨物専用の武蔵野南線を旅客化するという構想があったようですが、それは残念ながらたち消えになってしまいました。また、2030年頃までに横浜市営地下鉄が新百合ヶ丘まで延伸することが決まっています。先日、概略ルートと駅位置が決定したのですが、残念ながらやっぱり最寄り駅から大学まで徒歩30分くらいはかかりそうです。

聖マリアンナ医科大学皮膚科は初代関建次郎先生によって1972年に開講しました。2代が溝口昌子先生で好中球性皮膚症および色素異常症を中心に診療及び研究を行ってきました。第3代が相馬良直先生で強皮症や血管炎を軸に据え、教室を発展させました。そして、その後を私が引き継がせていただいています。

聖マリアンナ医科大学皮膚科では皮膚疾患を幅広く診ますが、特に私の専門である皮膚悪性腫瘍や血管炎に力を入れています。専門外来としては、腫瘍外来、リンフォーマ外来、血管炎外来、乾癬外来、



医局カンファにて

アトピー外来、レーザー外来があります。それに加えてつい先日ゲノム医療外来も始めました。聖マリアンナ医科大学病院はがんゲノム医療拠点病院に指定されており、がん遺伝子パネル検査を行っています。ゲノム医療外来では、患者さんの状況に応じて適切な遺伝子パネル検査を行い、腫瘍細胞にどのような遺伝子変異があるかを調べ、それに応じて最適な治療法を提供するのですが、まだ始めたばかりといった状況です。

腫瘍外来は私や大橋洋之医師を中心に、皮膚悪性腫瘍に対して手術や分子標的薬、免疫チェックポイント阻害薬などを用いた集学的治療を行っています。今まで手の打ちようがなかったような症例でも、一定の割合で効果がみられ、死の淵から生還するのを見るのは非常に感慨深いものがありますが、その一方で治療の効果が得られず、徒らに副作用ばかり出る羽目に陥る場合もあり、なかなか一筋縄ではいきません。皮膚のリンフォーマは稀な疾患ではありますが、重要な疾患であり尚且つ専門とする皮膚科医は限られています。リンフォーマ外来は宮垣朝光医師を中心として、紫外線照射療法から進行期に対する経口の抗がん剤治療まで幅広く行っています。また、最近オンライン相談も始めました。血管炎外来は竹内そら医師などが担当しており、リウマチ・膠原病・アレルギー内科と連携して、多くの患者さんの診察にあたっています。乾癬外来はOBである渡

部秀憲医師の助力を仰いで重症乾癬患者に対して種々の生物学的製剤を用いています。アトピー外来では宮垣朝光医師や岡野達郎医師を中心として、適切な外用療法と生物学的製剤を組み合わせた治療を行うと共に他施設共同の臨床研究に参画しています。レーザー外来では、最近V-beamレーザーが入りました。竹内そら医師を中心に種々の色素病変に

対する照射を行うとともに、乳児血管腫に関しては小児外科とタイアップして治療を行っています。

今後、近隣のクリニックとの連携を更に深めると共に、周囲の病院との病病連携も深め、川崎北部を中心とする患者さんに貢献していければと思っています。今後とも、ご指導ご鞭撻の程どうぞよろしくお願い致します。



薬価基準収載

グリテール含有副腎皮質ホルモン剤

グリメサゾン[®]軟膏

GLYMESASON[®]

Dexamethasone

GLYTEER

※効能・効果、用法・用量、禁忌、使用上の注意等については、製品添付文書をご参照ください。



製造販売元(資料請求先)
藤永製薬株式会社
東京都千代田区丸の内3-3-1 新東京ビル



販売元
第一三共株式会社
東京都中央区日本橋本町3-5-1